青森県総合学校教育センター　長期研究講座報告書　[2017.3]
Ｇ２―０３

中学校　社会

中学校地理的分野「日本の様々な諸地域」において，思考力・判断力・表現力を高める生徒を育成する指導法の研究
－白地図・文章・キャッチフレーズで小単元をまとめる活動をとおして－

三沢市立第一中学校　　教諭　　附　田　　典　雄

要　　旨

本研究は，中学校地理的分野の「日本の様々な諸地域」において，学習する視点に沿って白地図と文章，キャッチフレーズをつける小単元のまとめ活動を繰り返し行うことが，思考力・判断力・表現力を高めるために有効であることを，実践をとおして明らかにするものである。

その結果，学習内容を適切にまとめ，自分の言葉で表現する力が高まったことを示す変容が見られた。

キーワード：中学校　地理的分野　白地図　文章　キャッチフレーズ　思考力・判断力・表現力

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省中学校学習指導要領解説社会編(2008)の内容(２)ウ「日本の諸地域」については「日本を幾つかの地域に区分し，それぞれの地域について(ｱ) から(ｷ) で示した考察の仕方を基にして地域的特色をとらえさせる」とある。つまり，各地方の特色を(ｱ) から(ｷ) の７つの視点に沿って学習することで地域の特色をとらえさせるということである。

また，学習指導要領解説に掲載されている学習展開例には，各小単元の終わりに分布図や地図などを活用した表現，文章によるまとめなどの活動を位置付けるとしている。社会科だけでなく全教育活動において，観察・実験やレポートの作成，論述といった学習活動を充実させ，学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成が求められている。岩田・米田(2009)は「社会科では，特質を踏まえて講義，観察，調査，討議などの学習過程を大切にし，学習過程のどの部分においても主な手段として言語が使われていることを忘れてはならない。社会科の授業を効果的に展開していくことで言語力を育成するということが必要である」としている。このことから学習したことを自分なりにまとめる力が身に付けば，言語力が育成されると考える。

本校の生徒は，授業において教師からの問いかけに対する反応は積極的であるものの，じっくりと考えて自分の意見や考えを書くことを苦手としている。これまでの授業では，一時間ごとに提示した重要語句を用いた文章によるまとめを行ってきた。しかし，生徒が書く文章には，社会的事象に対する自分の考えは書かれていなかった。そこで今後は，小単元の学習内容をまとめて書く力，社会的事象に対して自分の考えをもち書く力の向上を図りたいと考えた。

そこで，本研究で各小単元の終末に白地図を使って視覚的にまとめる，文章でまとめる，地方の特色を表すキャッチフレーズをつけるという連続したまとめ活動を取り入れる。学習内容を白地図上にまとめることで，生徒自身が情報を整理でき，文章でまとめやすくなると考えた。また，キャッチフレーズをつくることで，各地方の特色を短い言葉で表現する力を向上させたいと考えた。これらの活動を順番に繰り返し行うことにより，各地方の特色を学習する視点に沿って学習内容を的確にまとめ，社会的事象に対する自分の考えを表現することで，思考力・判断力・表現力を高めることができると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

中学校地理的分野の「日本の諸地域」において，思考力・判断力・表現力を高めることができる生徒を育

成するために，学習する視点に沿って白地図，文章，キャッチフレーズをつける小単元のまとめ活動を繰り返し行うことが有効であることを，実践をとおして明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

中学校地理的分野の「日本の諸地域」において，学習する視点に沿って白地図，文章，キャッチフレーズをつける小単元のまとめ活動を順番に繰り返し行うことで，思考力・判断力・表現力を高めることができるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　研究における基本的な考え方

(1) 思考力・判断力・表現力について

「思考力・判断力・表現力」について小原(2009)は「既に習得している基礎的な知識・概念・技能を活用して，社会的事象や問題に対する『どのように，どのような』『なぜ，どうして』『どの解決策が望ましいのか』という問いに答えていく力」としている。

本研究における「思考力」は，社会的事象がなぜ起きているのかを考える力とする。「判断力」は,社会的事象についてどうしたらいいのかを考え，解決していくための判断をする力とする。「表現力」は，学習内容を目的に合わせて的確に整理し，自分の言葉で表す力とする。

また，地図や資料を活用して，自分が習得した様々な知識や技能を自分の言葉で文章にし，論述する力を身に付けるということは社会科の授業で求められていることである。日本の各地方における特色ある事象と他地方の事象を関連付けて地域的特色を捉えるようにし，小単元ごとにまとめる活動をとおして思考力・判断力・表現力を高めることができると考える。

(2) 地理的な見方・考え方について

中学校学習指導要領解説社会編の地理的分野では，「地理的な見方とは，日本や世界に見られる諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりで地理的事象として見いだすことであり，地理的な考え方とは，それらの事象を地域という枠組みの中で考察するということ」としている。

本研究では，「地理的な見方」を地理的事象がどこに位置し，どのように広がっているのかを読みとる力とする。「地理的な考え方」を，地理的事象がなぜそこにあるのか，いつからみられるものなのか自然条件や人々の生活との関わりで読みとる力とする。各地方を七つのそれぞれの視点に沿って学習することで地方の特色を明確にし，小単元の学習内容を白地図，文章，キャッチフレーズをつけるまとめ活動をとおして，生徒自らが地理的な見方や考え方を身に付けることができると考える。

(3) 研究内容

本研究は，思考力・判断力・表現力を高める生徒を育成するために，小単元ごとにまとめの時間を設定し学習する視点に沿って，①白地図でまとめる，②文章でまとめる，③地方のキャッチフレーズをつけるという順番でまとめを繰り返し行うことが有効であるかを検証する。

①は，白地図を使って視覚的にまとめることによって，地域の諸事象を位置や空間的な広がりで整理する。②は，①の視覚的なまとめを生かして，地域の特色及び地域の課題への対策についての自分の考えを含めたまとめを文章で行う。③は，①と②のまとめを生かして，キャッチフレーズをつけることで地域の特色を短い言葉で表現する。本研究は，四地方の学習について①から③のまとめを順を追って行い，その変容について研究するものである。

(4) 検証方法

ア　白地図，文章，キャッチフレーズのまとめの内容の評価が，四地方の学習でそれぞれどのように変容するかを生徒のまとめたワークシートから分析する。

イ　文章によるまとめの内容が回数を経て質的にどのように変容するかを，生徒のまとめた文章から分析

する。
ウ　視覚化した白地図が文章化の手立てとして有効であったかを，生徒アンケートから分析する。

２　研究の実際

(1) まとめの手立て

小単元の終末に各地方の学習内容をまとめる時間を設定し，学習する視点に沿ってまとめることができるよう白地図，文章化するための欄，キャッチフレーズをつけるための欄を設定したワークシートを使用した。白地図でまとめる，文章でまとめる，キャッチフレーズをつけるという順番でまとめる活動を四地方の学習で繰り返し行った。

まとめの時間の流れは，これまでの学習内容の振り返り約５分，白地図によるまとめ約25分，文章によるまとめ約10分, キャッチフレーズをつける約５分, 文章によるまとめの発表約５分とおおよその時間を設定して行った。まとめた後には生徒に達成度の自己評価アンケートを実施した。

①白地図は，これまでの学習内容を学習する視点を生かして自由に記入させた。視覚的にまとめることで地方の特色ある事象を位置や空間的な広がりの中で整理することができるようにした。
②文章は，白地図で視覚的にまとめたものを生かして自分の言葉で文章化させた。地方の特色及び課題への対策に対する自分の考えを文章の中に含めるよう指示した。
③キャッチフレーズは，白地図によるまとめ，文章によるまとめを生かして地方の特色を短い言葉で表現させた。

(2) 単元を学習する視点と評価

１回目：九州地方［学習する視点］　環境問題・環境保全に向き合う人々のくらし

	評価規準	評価基準	
白地図	九州地方の環境問題や環境保全の取組について具体例を書くことができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，環境問題や環境保全の取組の背景や分析なども記入している。	Ｂ：既習事項を基に以下の点を記入している。 ・環境問題 ・環境保全の取組
文章	九州地方の環境問題や環境保全の取組について白地図のまとめを基に文章でまとめることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，環境問題や環境保全の取組に対する自分の考えや他地方との関連を含めてまとめている。	Ｂ：既習事項を基に以下の点をまとめている。 ・環境問題 ・環境保全の取組
キャッチフレーズ	白地図，文章のまとめに即して九州地方のキャッチフレーズをつけることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，今後の方向性を含めたキャッチフレーズをつけている。	Ｂ：環境問題や環境保全の取組に関連するキャッチフレーズをつけている。

２回目：中国・四国地方［学習する視点］　都市と農村の変化と人々のくらし

	評価規準	評価基準	
白地図	中国・四国地方の過疎や過密の現状について具体例を書くことができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，過疎や過密の背景について記入している。	Ｂ：既習事項を基に以下の点を記入している。 ・過疎や過密の現状
文章	過疎や過密の現状について白地図のまとめを基に文章でまとめることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，過疎や過密に対する取組について自分の考えや他地方との関連を含めてまとめている。	Ｂ：既習事項を基に以下の点をまとめている。 ・過疎や過密の現状
キャッチフレーズ	白地図，文章のまとめに即して中国・四国地方のキャッチフレーズをつけることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，今後の方向性を含めたキャッチフレーズをつけている。	Ｂ：過疎や過密に関連するキャッチフレーズをつけている。

３回目：近畿地方　［学習する視点］　歴史の中で形づくられてきた人々のくらし

	評価規準	評価基準	
白地図	近畿地方の都市の発展の歴史について具体例を書くことができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，歴史を守る取組の背景なども記入している。	Ｂ：既習事項を基に以下の点を記入している。 ・都市の産業発展の歴史
文章	近畿地方の都市の発展の歴史について白地図のまとめを基に文章でまとめることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，歴史を守る取組に対する自分の考えや他地方との関連を含めてまとめている。	Ｂ：既習事項を基に以下の点をまとめている。 ・都市の産業発展の歴史
キャッチフレーズ	白地図，文章のまとめに即して近畿地方のキャッチフレーズをつけることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，今後の方向性を含めたキャッチフレーズをつけている。	Ｂ：都市の発展の歴史に関連するキャッチフレーズをつけている。

４回目：東北地方　［学習する視点］　伝統的な生活や文化を守り育てる人々のくらし

	評価規準	評価基準	
白地図	東北地方の伝統文化や伝統産業について具体例を書くことができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，伝統文化や伝統産業が発展した背景や課題について記入している。	Ｂ：既習事項を基に以下の点を記入している。 ・伝統文化の分布 ・伝統産業の分布
文章	東北地方の伝統文化や伝統産業について白地図のまとめを基に文章でまとめることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，伝統文化や伝統産業の取組について自分の考えや他地方との関連を含めてまとめている。	Ｂ：既習事項を基に以下の点をまとめている。 ・伝統文化の分布 ・伝統産業の分布
キャッチフレーズ	白地図，文章のまとめに即して東北地方のキャッチフレーズをつけることができる。	Ａ：評価基準Ｂの内容に加え，今後の方向性を含めたキャッチフレーズをつけている。	Ｂ：伝統文化や伝統産業の取組に関連するキャッチフレーズをつけている。

３　考察

(1) 白地図，文章，キャッチフレーズの変化について

図１から分かるように，白地図によるまとめは，回数を重ねる程Ａ評価の割合が多くなる傾向があるとともに，３回目以降は全ての生徒がＡもしくはＢの評価となった。また，図２は，２回目と４回目の評価の変容を表したものである。評価が向上した生徒の割合が22.2％で，中国・四国地方，東北地方がともにＡ評価の生徒の割合が51.9％で，合計が74.1％となった。

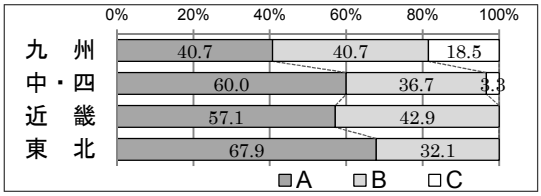

図１　評価の変容（白地図によるまとめ）

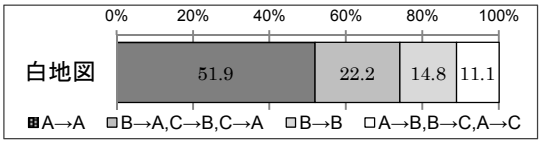

図２　評価の個人ごとの変容（白地図）

図３のように，評価が上がった生徒が書いた白地図を比較してみると，２回目は学習した内容を白地図に記入するだけであったが，４回目に地方の特色ある事象の現状，課題，対策を書き表すことができるようになった。また，その地方と他地方との関連などについても白地図上に記入することができた。

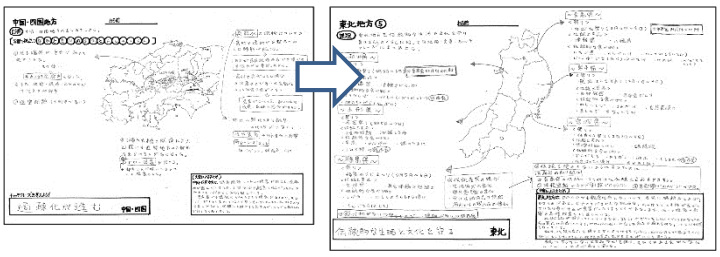

図３　白地図によるまとめの変容

白地図上にイラストや吹き出しを入れたり，具体的な数字を入れたりしてまとめることで地方の特色ある事象を位置や空間的な広がりとの関わりで理解することができるようになったと考えられる。次に，文章によるまとめについてであるが，図４から分かるように，回数を重ねる程Ａ評価の割合が多くなる傾向があるとともに，最終的には，全ての生徒がＡもしくはＢの評価となった。図５は，２回目と４回目の評価の変容を表したものである。Ａ評価の割合が４回目で大きな変化が見られ，最終的には全ての生徒がＡまたはＢ評価となった。また，個人ごとの評価の変容を見ると，図５から分かるように，評価が向上した生徒の割合が51.9%，ともにＡ評価の生徒の割合が18.5%となり，合計が70.4%となった。

実際に生徒が書いた文章を比較してみると，図６から分かるように，「過疎」「過密」といった重要語句は入っているものの，その課題に対する具体的な取組についての記述が十分ではない。また，白地図でまとめられた内容を文章に十分に表すことができていないとともに，自分の考えが具体性に欠けていた内容が多かった。それが，４回目は白地図でまとめた内容をうまく文章に表すことができており，対策についても「今も変わらずに守り続けられているものをもっと多くの人にＰＲしていけたらいい。」と具体的な文章表記になっている。白地図によるまとめと文章によるまとめの活動に繰り返し取り組む中で，学習内容を相互に結び付けて，地方の特色をまとめる力が高まったものと思われる。

最後に，キャッチフレーズによるまとめについてであるが，図７から分かるように，２回目，４回目で大きな変化が見られ，Ａ評価の割合が多くなるとともに，最終的には全ての生徒がＡもしくはＢの評価となった。また，個人ごとの評価の変容を見ると，図８から分かるように，評価が向上した生徒の割合が48.0%，ともにＡ評価の生徒の割合が29.6%で，合計が77.6%となった。図９のように，生徒が書いたキャッチフレーズを比較してみると，中国・四国地方では過疎や過密に関するキャッチフレーズであったものが，東北地方では「人々を引きつける」という部分に東北地方の魅力を自分なりに伝えようとしている態度が見られた。初めは，地方の特色を事実としてのみ表現した記述が多く見られたが，繰り返し活動に取り組む中で，地方の特色を魅力や良さとして捉え，それを表現することがキャッチフレーズとしての条件であることを理解できるようになったため，次第に工夫してつくれるようになったのではないかと考える。また，白地図のまとめ，文章によるまとめを生かして，地方の魅力を表現したキャッチフレーズをつける力が徐々に高まったのではないかと考える。

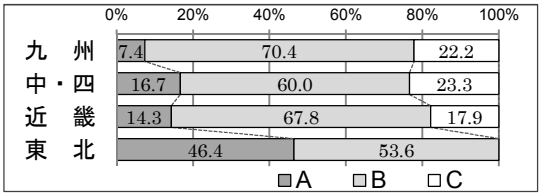

図4　評価の変容（文章によるまとめ）

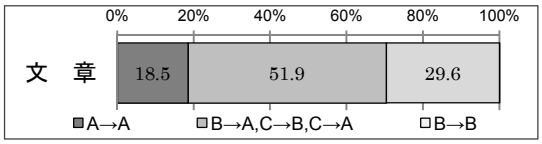

図5　評価の個人ごとの変容（文章）

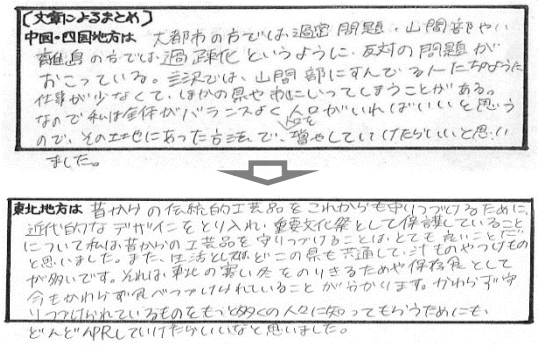

図6　文章によるまとめの変容

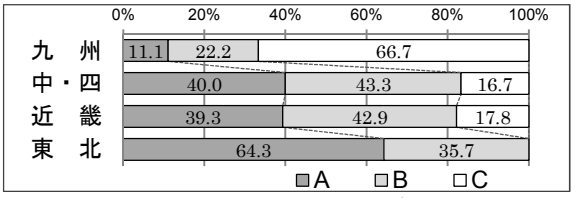

図7　評価の変容（キャッチフレーズによるまとめ）

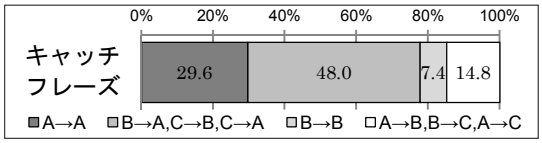

図8　評価の個人ごとの変容（文章）

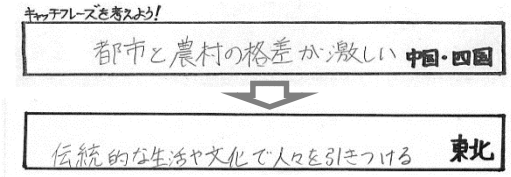

図9　キャッチフレーズの変容

(2) 視覚化した白地図が文章化の手立てとして有効であったかについて

それぞれの小単元の最後に，白地図・文章・キャッチフレーズでまとめる活動についてのアンケートを実施した。図10から分かるように，回数を重ねる度に「役に立った」と答える生徒の割合が増えた。自由

記述には「白地図のまとめは学習した内容全体を視覚化できて，文章によるまとめをする際に書きやすかった。」「白地図のまとめの後に文章によるまとめをすることは，文章によるまとめに何を書くべきかが明確になり書きやすかった。」という回答が見られた。また，文章のまとめについても「各地方の現状や課題に対する自分の考えを書くことによって思考を自ら整理しながら書く力が向上できたと思う。」といった回答が見られ，白地図によるまとめの後に文章によるまとめを行うことが，手立てとして有効であったと考えられる。

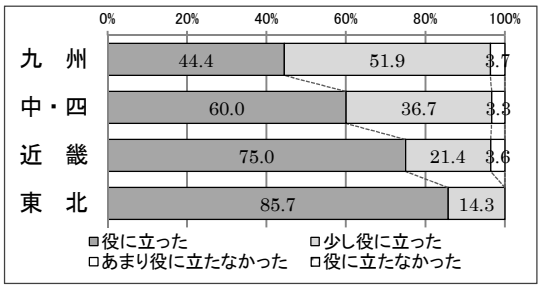

図 10　事後アンケート「白地図によるまとめは、文章のまとめに役に立ったか」

Ⅴ　研究のまとめ

学習する視点をあらかじめ生徒たちに提示して，小単元の学習を進め，視点を意識させて白地図にまとめる活動に取り組ませることで，生徒は学習内容を位置や空間的な広がりとの関わりで地方の特色を見いだすことができたと考えられる。また，白地図で学習内容を整理し，視覚的にまとめた白地図を生かして，文章やキャッチフレーズとして自分の言葉で表現することができた。

さらに，これまで「地理は苦手だ」「よく分からない」と言っていた約 30%の生徒が，まとめ活動に繰り返し取り組んでいく中で，自ら進んで白地図や文章でまとめられるようになった。生徒が自らの学習に対して達成感と自信を得たことをうかがい知ることができ，学習意欲の向上にもつながったと考えられる。

これらのことから，学習する視点に沿って白地図・文章・キャッチフレーズをつけるという順序で小単元のまとめ活動に繰り返し取り組ませることは，生徒の思考力・判断力・表現力を高め，地理的な見方・考え方を身に付ける上で有効であったと考えられる。

Ⅵ　研究の課題

四回にわたる白地図・文章・キャッチフレーズで小単元をまとめる活動を終えて，「白地図によるまとめはとても分かりやすかった。」「文章でまとめることは今まで嫌だったけど活動を繰り返すごとに文章でまとめることができるようになった。」「まとめを繰り返していくうちに地理の授業が好きになった。」といった生徒の反応があり，今まで地理的分野を苦手としていた生徒も意欲的に活動することができた。

しかし，文章にまとめる活動やキャッチフレーズをつける活動に取り組む際に，イメージをつかめずに作業が進まない生徒もおり，文章にまとめる活動における個に応じた支援や，キャッチフレーズをつける際の具体的な手立てをより充実させていくことが必要であった。

また，本研究では，三つのまとめ活動が生徒の思考力・判断力・表現力を高める上で有効であったと感じることができたものの，四地方を扱う順番を変えても同じように，思考力・判断力・表現力が高まっていくか，思考力や判断力がどのように高まったのかを判断する他の手段についても検討することが今後の課題であると考える。

〈引用文献〉

1　文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　社会編(平成 20 年 9 月)』

2　小原友行　2009　『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン中学校編』，p. 9，明治図書

3　岩田一彦・米田豊編著　2009　『「言語力」をつける社会科授業モデル中学校編』，p. 7，明治図書

〈参考文献〉

1　北尾倫彦　2011　『平成 24 年度版　観点別学習状況の評価基準と判定基準　中学校社会』　図書文化

2　青柳慎一　2016　『中学校社会科　授業を変える学習活動の工夫 45』　明治図書

3　初等中等教育局教育課程課　2016　『中等教育資料　平成 28 年 7 月号』pp. 19-20，ぎょうせい
4　国立教育政策研究所　2010　『評価基準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料(中学社会)』